

土木学会コンサルタント委員会 地方創生特別委員会

第5回 地方創生シンポジウム  
静岡県三島市

— 開催概要 —

- タイトル：リーダーが語る地方創生  
「潤い（環境）のあるまちから潤う（活力）まちへ」
- 開催日時：平成31年1月29日（火）14：00～17：30
- 会場：土木学会 2F講堂

■■基調講演

講演者：渡辺豊博 NPO 法人グラウンドワーク三島 専務理事・事務局長  
市民力・地域力を結集したまちづくりとは？

河田亮一 加和太建設株式会社 代表取締役  
地域企業からの元気なまちづくりへの取組

土屋和大 静岡県経済産業部農地保全課 課長代理  
静岡県における協働による地域づくり・活性化への取組

■■パネルディスカッション

コーディネーター：溝口伸一 土木学会コンサルタント委員会 地方創生特別  
小委員会委員

<メンバー>

基調講演者1：渡辺豊博  
NPO 法人グラウンドワーク三島 専務理事・事務局長

基調講演者2：河田亮一  
加和太建設株式会社 代表取締役

話題提供者3：土屋和大 静岡県経済産業部農地保全課 課長代理

## 1. シンポジウムの主旨と静岡県三島市の選定理由

### (1) シンポジウムの主旨

「地方創生」の中心的役割を担う方々に発表者としてお集まりいただき、それぞれの立場での活動について説明いただくとともに、以下の観点から意見交換型のシンポジウムを行った。

- ①活動を牽引するリーダーの存在
- ②インフラ整備との連携を通じた「地方創生」活動の活発化
- ③「地方創生」を進める上でのステークホルダー間の合意形成
- ④施策のPDCAの方法と効果把握、評価

一昨年度より、土木学会コンサルタント委員会地方創生“特別”小委員会として、「首長・リーダーが語る地方創生」として、4回シリーズでシンポジウムを開催してきた。

本シンポジウムが好評だったため、臨時的な“特別”小委員会を、常設の委員会として設立し、継続してシンポジウムを行うこととした。(年2回程度の開催を予定。) ついては、土木学会会員にとって分かりやすいテーマ設定と、それに沿った地域の首長やリーダーの方々に取組みを紹介していただき、その意味や意義を考え、土木技術者として地方創生における役割を再認識する機会を提供したいと考えている。

今回は、「農山村地域のむらづくり、まちづくり」というテーマを想定している。

### (2) 静岡県三島市の選定理由

静岡県を舞台に、NPO法人(グラウンドワーク三島)、民間企業(加和田建設)、行政(静岡県)といった多様な主体が地方創生にどのように取り組み、地域活性化に貢献しているのかを学ぶことを目的として選定した。

なお、本委員会のシンポジウムの対象事例は、以下の内容としており、今回は「地域の協働の取組」の事例としている。

- ①インフラ・空間整備
- ②観光振興、地域ビジネス、雇用創出のソフト施策
- ③地域の協働の取組

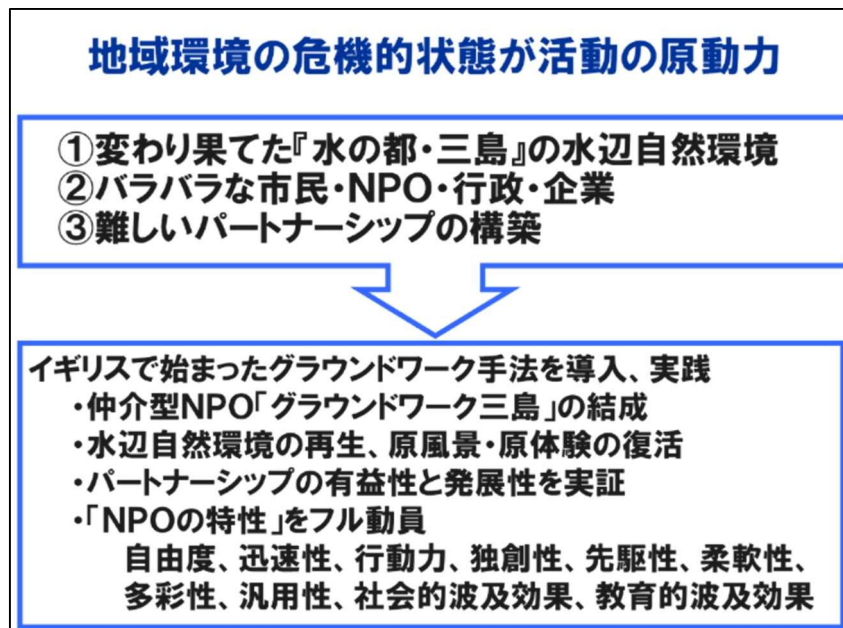
## 2. シンポジウムの内容・要旨

### 2.1. 基調講演①

講演者 : 渡辺豊博 NPO 法人グラウンドワーク三島 専務理事・事務局長  
 題名 : 『市民力・地域力を結集したまちづくりとは?』

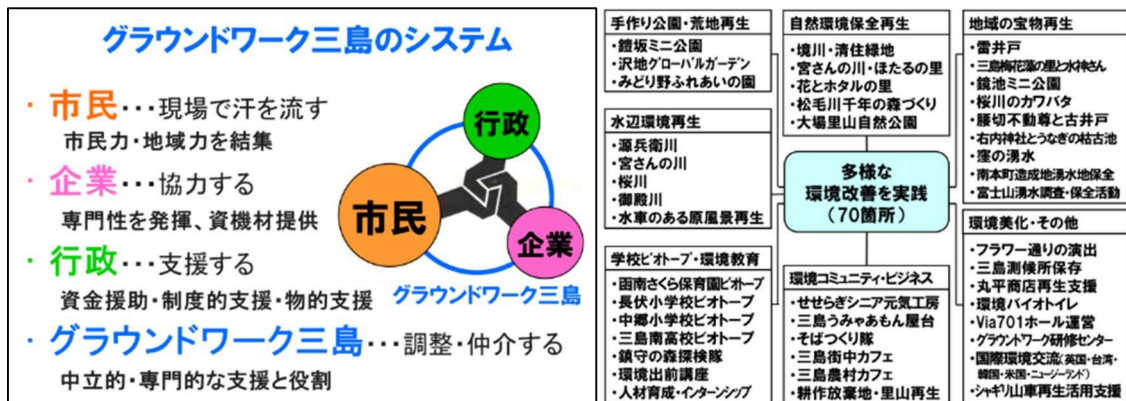
#### ①グラウンドワーク三島設立の背景

- ・グラウンドワーク三島の創設は 30 年前で、水の都・三島の危機的状態が活動の原動力となった。



#### ②グラウンドワーク三島の役割

- ・市民、企業、行政の特性を生かしながら一体化させるよう、調整・仲介する役割である。



### ③グラウンドワーク三島の実績と効果

- ・三島は自然環境が豊かな一方、環境汚染が顕著で付加価値を見失っていたため元に戻す「原点回帰のまちづくり」を行った。
- ・結果として、観光客数が174万人（1991年度）から786万人（2016年度）に増加。

#### グラウンドワーク三島の実績と効果

<b>活動期間</b>	設立から28年が経過
<b>関連団体</b>	20の市民団体がネットワークを形成
<b>実践地区</b>	70箇所のまちの魅力アップを実践
<b>参加人数</b>	35万人のボランティアが参加
<b>視察受入</b>	3万人・1,500団体にノウハウ提供
<b>社会的波及効果</b>	観光交流客数174万人(1991年度)が786万人(2016年度)と約4.5倍に増加
<b>環境再生から観光振興</b>	川・湧水池・森・里山・ミシマバイカモ・ゲンジボタル・ホトケドジョウの再生、まちの回遊性の仕掛け

### ④グラウンドワーク三島の取組

- ・NPOとして活動を持続させていくための資金をどう集めるかが重要
- ・小さな成功モデルを積み重ねて大きな成功モデルにしてまち全体を変えていく。
- ・大事にしていることはボトムアップで、現場からコトを変えることである。

## グラウンドワーク三島の経営理念

「先生、NPOって儲かりますか？」  
春風社発行、渡辺豊博 著

- NPOは社会の課題と歪みを埋める「隙間産業」だ
- NPOは「市民会社」としてのビジネスセンスが必要だ
- 「ビジネスチャンス」は地域住民との対話から
- 人は人のために生きてこそ人なり
- 現場に具体的な「成功モデル」がなければ信用されない
- 辛く地味な仕事でも生きがいとやりがいを持ち続ける
- 現場での1つ1つの実践活動が「地方創生」の原点
- 継続なくして信頼なし
- 「集中」と「分散」の発想  
1つの「成功モデル」を次々に創り上げていくこと

## グラウンドワーク三島の活動手法

- ① ボトムアップアプローチ(下から上へ、現場主義、実践・成果主義)
- ② パートナーシップアプローチ(市民・NPO・行政・企業との有機的な連携)
- ③ ネットワークアプローチ  
(多様な市民団体、NPO同士の連携、共存共栄・相互補完の仕組み)
- ④ ホリスティックアプローチ(人の心を変えること、自立、自律への社会教育)
- ⑤ マネジメント力(保護から保全・活用へ、環境と経済との両立)
- ⑥ ビジネス力(地域資源を活用したNPO・市民ビジネスの創業)
- ⑦ キャパシティビルディング(住民の政策立案・執行能力の育成)
- ⑧ 儲かる・稼ぐNPOへ(小さな産業の起業、雇用の確保と生きがいづくり)
- ⑨ 地域経営の主体者(未開発の農業・環境・文化・歴史・景観資源の活用)
- ⑩ 人間的サービス提供の担い手(死にがいのあるまちづくりの先導者)

※地域は誰のものかの問題意識と具体的な行動力

- ・現在、約 70 箇所（28 年間）のプロジェクト実践地があり、「点から線、線から面」というやり方で活動範囲を拡大させている。
- ・現在まちの中だけではなく、まちの外へも取組を広げていくことに取り組んでいる。  
→「水の都・三島」の新たな魅力アップ整備計画



#### ④「水の都・三島」の新たな魅力アップ整備計画

- ・ 400 年前に開削された人工水路であるが、1990 年代より汚染が激しくなった。
- ・ そこでグラウンドネットワーク三島が立ち上がり、川の清掃活動等をはじめた。
- ・ 生まれ変わった源兵衛川では蛍や絶滅危惧種・ミシマバイカモが見られるようになった。  
→世界的に価値がある川へと変わっていった。









- 2) みどり野ふれあいの園整備プロジェクト  
・地域総参加で公園づくり





3) 腰切不動尊・古井戸再生プロジェクト  
・忘れ去られた祭りの復活

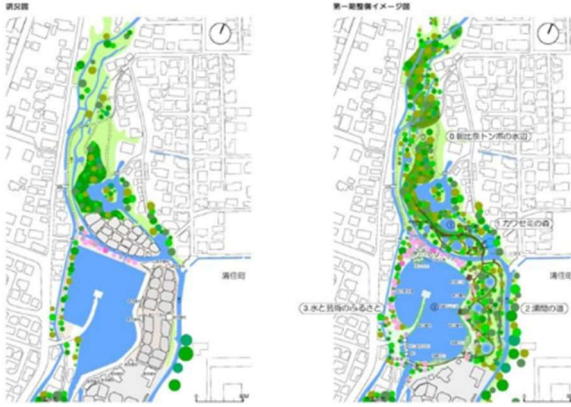


4) 狩野川の原風景であるふるさとの川と森の再生・保全  
・松毛川「千年の森」づくり



- 5) 境川・清住緑地再生プロジェクト  
・水の郷湧水公園

# 境川清住緑地・水の郷大湧水公園 整備構想図



## 2.2. 基調講演②

講演者：河田亮一 加和太建設株式会社 代表取締役

題名：『地域企業からの元気なまちづくりへの取組』

### (1) 会社の概要

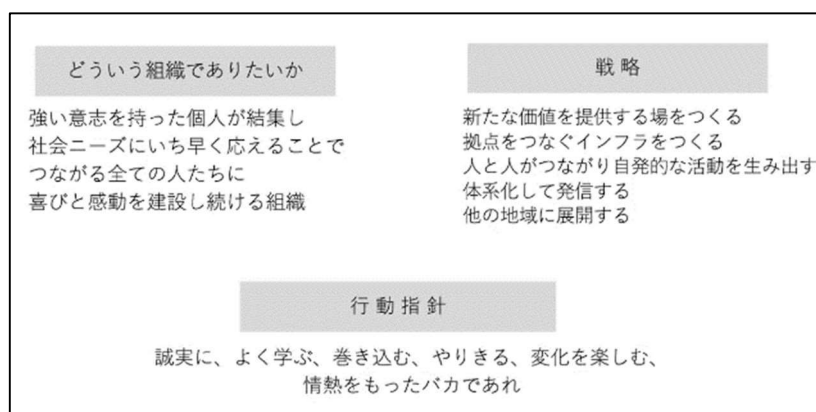
- ・創業 1946 年、社員数 278 名、本社静岡県三島市
- ・建設業として、国交省、市町村の公共工事を主体に実施。また建設業としては公共工事に加え学校、病院等個人住宅以外の建築を実施している。



#### ▲建設業

#### ▲建築業

- ・会社のミッションは「世界が注目する元気なまちをつくる」





- ・「モノづくり」だけでなく、「コトづくり」、「まちづくり」、「会社づくり」まで事業領域を広げている。
- ・「地域を好きな人を増やすこと」を考えながら事業を推進。
- ・会社の戦略は以下の通り。
  - ①新たな価値を提供する場をつくる
  - ②場をつなぐインフラをつくる
  - ③人と人がつながり自発的な活動を増やす

## (2) 具体的な取り組み

### ①道の駅の運営

- ・建築、施工、物産販売所の経営を実施している。
- ・また、町の魅力となる商品開発、町のプロモーションビデオ、アイドルユニットをつくりまちのPRを実施。



### ②「少年自然の家」の運営（指定管理）

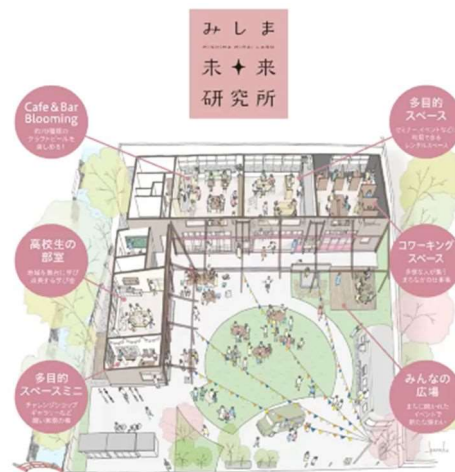
- ・施設のリノベーションを実施。
- ・コンセプトは、子どものときに訪れた場所に大人になっても行きたいと思える施設。





### ③みしま未来研究所

- ・ コワーキングスペースや多目的スペースをつくっている。
- ・ 園庭でワイン好きな方がパーティーを開く等で活用されている。
- ・ また、古い幼稚園舎をシェアハウスとして改築し、運営している。



### ④ビール工場、レストランの運営

- ・ 富士山の湧き水を活用しビールを醸造。



### 2.3. 基調講演③

講演者：土屋和大 静岡県経済産業部農地保全課 課長代理

題名：『静岡県における協働による地域づくり・活性化への取組』

(1) 静岡県の農業農村整備事業 (三島市)

①水環境整備事業 三島中部地区 (源兵衛川)

- ・全国初の水環境整備事業を活用し、整備を実施
- ・この整備が三島の観光交流やまちづくりの第1歩になった。

# 静岡県の農業農村整備事業（三島市）

## 水環境整備事業 三島中部地区（源兵衛川）



**概要**

事業工期：H2～9

事業概要：  
水環境整備1,500m

総事業費：  
969,100千円

- ②地域用水環境整備事業 水の都三島地区（松毛川）
- ・農業用水のため池ともなっている川の環境整備を実施

**静岡県の農業農村整備事業（三島市）**

**地域用水環境整備事業 水の都三島地区（松毛川）**



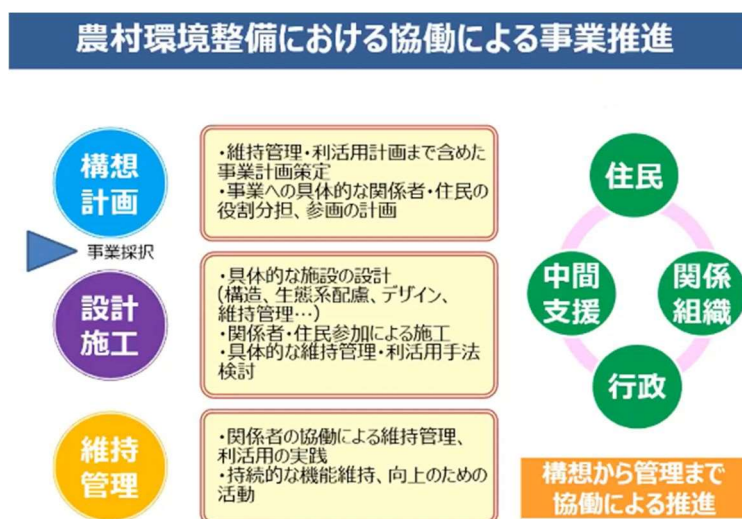
**概要**

事業工期：R1～7

事業概要：  
松毛川・大溝川  
親水景観保全整備

総事業費：  
534,000千円

- ・環境整備にあたっては、構想計画、設計整備等を行い、関係組織と協働し事業を推進。



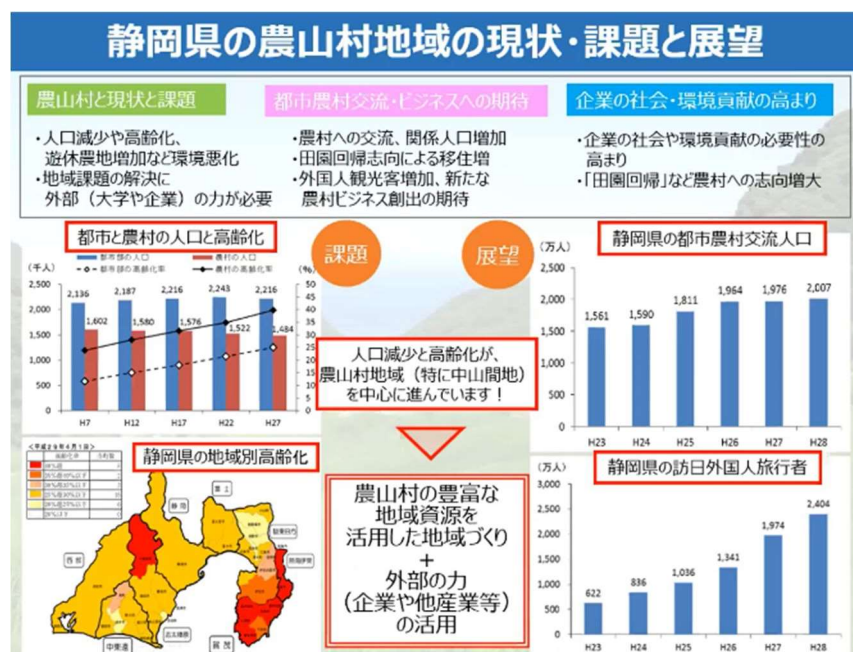
- ③静岡県における農山村振興のイメージ
- ・畑の区画整理を実施しているが、整備した施設をどのように利活用し、維持管理していくか、ということが重要。
  - ・環境、社会、経済のバランスの取れた持続可能な農山村づくりを支援することで、ハードだけでなく、ソフト事業も実施している。

#### ④むらづくり・活性化の支援

- ・情報発信、協働、人づくりを実施し、地域と協働できるまちづくりを実施。

#### (2) 静岡県の農山村地域の現状・課題と展望

- ・中山間地域では、高齢化が20年先行して進んでおり、農山村の資源が守られない現状にある。
- ・農山村の交流人口や訪日外国人旅行者は増えている。
- ・このことから、企業や他産業といった外部の力を活用し、農山村の豊富な地域資源を活用した地域づくりを実施していくことが大切であると考えている。



#### (3) 協働による邑づくりの応援プログラム

##### ①「一社一村しずおか運動」

- ・農山村では人や財源が不足している、また、企業のCSRの重要性から、農村と企業が相互の価値を創造し、マッチングする可能性に着目し、実施している運動。



## 一社一村しずおか運動の取組背景

### 農村と企業・都市を巡る情勢

#### 農村・集落

- ・ 過疎化、高齢化
- ・ 耕作放棄地増加
- ・ 農業用施設の維持管理困難
- ・ 集落機能の低下、限界集落
- ・ 多面的機能保全(洪水防止など)
- ・ 地産地消の普及

#### 企業・都市

- ・ 企業の社会的責任(CSR)の重要性
- ・ 農業ビジネスへの関心
- ・ 福利厚生、社員教育、社員交流
- ・ 定年帰農、田舎生活への憧れ
- ・ 安全安心志向

農村と企業が相互の価値を創造する  
協働活動の可能性

## 一社一村しずおか運動の認定基準

- ・ 農村と企業がそれぞれの資源、人材、ネットワーク等を生かし、**双方にメリット**のある協働を目指すものであること
- ・ **地域活性化**に向けた活動であること
- ・ 活動が継続して行われる見込みがあること  
(3年間以上)





## 一社一村しずおか運動による活動事例

### 農山村地域の資源保全と企業の環境改善・社会貢献活動

中日本高速道路㈱  
×  
郡田地区(浜松市北区)



暑熱によるみかんの農産作業

不二総合コンサルタント㈱  
×  
久留女木地区(浜松市北区)



●地域貢献により、企業イメージが向上しました!  
●社員のリフレッシュなど福利厚生が充実しました!

東光ガード㈱  
×  
鉄橋地区(静岡市葵区)



●畑田の田植え、草刈等の作業や遊休農地の解消に支援いただけました!  
●都市住民との交流により地域が元気になりました!

遊休農地で作ったお菓子を顧客に配るなど活用しています

### 地域課題の解決に向けた農山村と学校との協働

静岡大学農学部  
×  
大代地区(静岡市東区)



学生による研究報告会

常葉大学社会環境学部  
×  
下糸地区(富士宮市)



●将来を担う人材を育成するための、研究や実作業体験の場などができました!

東部特西支援学校伊豆松崎分校  
×  
松崎地区(船橋町)



●課題解決に向けたアイデアや農作業、施設管理に努力の支援が得られました!  
●若い世代との交流により、地域ににぎわいが生まれました!

常葉大学社会環境学部  
×  
石部地区(船橋町)

### 地域の農作物を使った新商品の開発

美孚成亭  
×  
とうもろの里(掛川市)



開発したメロンを使った小「メロン漬」

在来作物の菓をつかったお菓子「みさくぼ」  
×  
例郷草堂  
×  
水原地区(浜松市天竜区)



●地域農作物を使った商品開発、地産地消の取組で企業イメージが向上しました!  
●安全安心な野菜を使った魅力ある商品ができました!

遊休農地で栽培したサツマイモでつくった日本酒「天子の栗」  
×  
日本大学生物資源科学部  
×  
佐所半野地区(富士宮市)



●地域の農作物を使った新たな商品開発、企業のノウハウを得ることができました!  
●未利用野菜等の販路を確保できました!

開発したみかんを使用した餅「餅野」  
×  
美ノリレーゼ  
×  
鹿浜地区(浜南町)

### ②しずおか農山村サポーター『むらサポ』

- ・しずおかの農山村を守りたいという人、団体が登録可能で、現在95の団体が登録。
- ・広報誌や活動事例を見ていただき、同様の活動実施に興味がある関係者は県からアドバイザーを派遣し、活動をサポートしている。

### (4) マッチングやむらづくりのサポート体制

- ・むらづくりを実施している団体に委託し、研修会やイベント等を実施。

## マッチングやむらづくりサポートの体制



## マッチングやむらづくりサポートの体制

### むらづくりワンストップ窓口の目的・効果

- ① 農山村での地域づくりに実績を活かす  
…相談者目線のアドバイス、まず実践できる活動など
- ② 地域づくりアドバイザーの人的ネットワークの活用  
…イベントや6次化へのアドバイスや  
農山村と企業とのマッチングなどに実績
- ③ 地域づくりNPOの情報発信力の活用  
…SNS（フェイスブック、インスタグラム）等による拡散力など
- ④ それぞれの窓口（地域づくり団体）の特徴を活用  
…コミュニティ、マーケティング、ツーリズム、教育など  
行政（県、市町）も活用



## 2.4. パネルディスカッション

### ■基調講演に対する質疑

Q:文系大学出身の方が土木業界に足を踏み入れることになったということで、経験等教えていただきたい。(聴講者からの質問)

A:まちづくりにおいて文系理系どちらがいいのかということはないように思う。(河田社長)

A:今はあまり関係ないと思う。現場の技術的な部分は河田さんの会社の社員がトレーニングをしてくれる。自分で問題意識を感じ、主体的に社会でやらなくてはいけないことを認識しながら地震でスキルアップしていくことが必要ではないか。(渡辺専務理事)

A:農山村の話となると、社会学や文化といった広い分野に関わる。最近は農業土木を自力で勉強して県庁に入庁してくる学生もいる。意欲があれば何でもできるし、各分野にはプロがいるためそことつながりを持ちうまくやれるのではないか。

Q:竹林の再繁茂は早いと思うが継続的に伐採しながら活用する仕組みを教えてください。(聴講者からの質問)

A:竹は昔は燃料として大切な資源であった。いまは竹は邪魔者という扱いを受けてしまっているが、チップーという機械を使い定期的に肥料に変えている。その肥料を土にまぜて、植林をするが、保水性、保湿性がよく、99%の確率でうまく育っている。また、トマト等農作物を作る際にも肥料にまぜると大きいトマトが育つ。(渡辺専務理事)

### ■取り組みのきっかけについて

Q:行政、企業、NPOとそれぞれお立場が異なる中で、今、皆さん、まちづくり、むらづくりに取り組まれています。そのきっかけは何だったのか。(溝口委員)

A:グラウンドワークに対するこだわりは特にはない。いかに楽しくやれるかが大切だと考えている。(渡辺専務理事)

Q:建設業の再定義として地域活性化に取り組みながら事業を続けていると思うが、社員も含めて一緒にそういう考えのもと働いているのか。

A:建設業として新しい在り方、まちづくりを軸にして地方ゼネコンのありかたを変えていこうということについては多くの社員がコミットしている。(河田社長)

Q:むらづくりに関わる一番のポイントはどこにあるのか。(溝口委員)

A:地域づくりにかかわっているポイントは、「誇り」である。自分が育ってきた地域がよいところだという思いがある。(土屋課長代理)

### ■外部との交流・連携の効果について

Q:農業を続けていくのは難しいと思うが、外部との交流・連携は、農業を魅力あるものにするためにどういった効果をもたらしているか。(溝口委員)

A:農家だけではなく、応援団としての都市住民、若者を巻き込みながら、ただし農業のみ

で生活することは難しいため、ある意味「兼業」社会人を増やして余っている土地をうまく活用し、全体力で農業の基盤を維持していきたい。現在3人の若者が関わり年間2千2百万を売り上げているが、農業だけでは設けられないため、NPO 法人との複合経営を行っており維持している。農業の現場と NPO を組み合わせた新しいビジネスモデルを作りたいと思い5年間戦ってきている。次はお酒を造りたいと考えている。(渡辺専務理事)

**Q:**建設業の枠を超えてビール醸造等されている。ビジネスという点ではリスクがあると思うが、建設業の枠を超えた取り組みに着手している背景を教えてください。(溝口委員)

**A:**背景は、会社のミッションに基づいて地域の活性化のためにどんなものがあれば活性化に寄与できるかを考えている。ビジネス的には大変ではあるが、発信力や広告などの効果は非常に大きい。(河田社長)

**Q:**外部と地元の農家や資源を活かし新しい商品をつくる一村一社運動やむらサポに通じると思うが、こういうことをすれば良い商品ができる、事業が成功した等の事例はあるか。(溝口委員)

**A:**赤字になったから悪いというわけではない。人材育成ということも重要である。そこで生まれた人材やノウハウをどううまく使うかは工夫次第である。(渡辺専務理事)

#### ■三島での取り組み成功のポイントについて

**Q:**三島でのまちづくりがうまくいっているポイントはどのような点にあるのか。(溝口委員)

**A:**みんなでやれば怖くない。まちはだれのものということを考え、自分のまちをどう活性化するかという戦略性を市民がしてくれるかが関わっている。(渡辺専務理事)

**Q:**地域を好きになるひとがたくさん増えていくということが、河田社長の企業のビジネスにどうつながっているのかというところを紐解いて解説頂きたい。

**A:**二つ要素があると思う。一つは、いろんなチャレンジをしていくことが大事で、まちや会社にその環境があるかないかが重要である。三島というまちではチャレンジを許容してくれる文化があり、グラウンドワークがその土台を作ってくれたのだと思う。もう一つは、人の採用。若い人ほど働く意義等を求めていると感じる。そう感じながら働くことで人材が優秀になっていく。稼げるようになるプロセスの中で、ひとが成長して商売が広がっていくことが往々にしてある。(河田社長)

**Q:**三島の地域のポテンシャルを守ってきた中で、地域が変わった、評価が良くなった変化点のようなものはあったのか。(工藤委員)

**A:**1990年にグラウンドワークができ、それからゴミ拾い等地道な活動を続け、10年かけて地域が元気になってきた。まちの飲食店、青年会議所が地域の付加価値をどうやって地域経済振興に活用しようかを考え、うなぎ、コロッケ、さつまいも、若鳥のから揚げ等食文化を中心に面白いものを作り始めた。基盤となるネタはグラウンドワークが作

ってきたが、それを活用したのは商売上手な商人たちで、地域が活性化していった。(渡辺専務理事)

#### ■これまでの経験と今の関係について

Q:お三方の話を聞いていて、いろんな立場にたっているいろんな経験をする中でも、地域を元気にするにはいけないという軸があり、いまにつながっていると感じる。一方、コンサルタントに足りないことは、コンサルタントはコンサルの仕事しかやっていない。皆さんのキャリアがいまにどうつながっているのかをお聞きしたい。(玉岡委員)

A:役所だけでやる公共事業ではまちのためにいいものにならないこともある、と以前渡辺専務理事に教わったことがある。地域の人とのつながりをもたないと役所としてプロジェクトができない。コンサルタントに対しては、いろんな現場に足を踏み込んでほしい。行政もまた同じである。(土屋課長代理)

A:社会環境の変化が大きく不確実性が高い時代になっているため、ひとつの仕事だけしていると固定観念ができてしまい、変化へ対応することへの邪魔になる。いろんな課題は、人の価値観が多様化していることにも起因していると思う。自身もNPOに携わっているが、組織の立場等関係ないため、自分にとって勉強になっている。(河田社長)

#### ■コロナ禍でのまちづくりについて

Q:コロナの影響で、誘客についてはどの程度影響があるのか。また、コロナにより今後大都市圏から地方への移転が進むのではないと思われる。コロナを地方の再生、東京一極集中からの脱却という意味で、地方ではどう受け止めていくべきなのか、またそれにあたってみなさんがやっていこうと思っていることがあれば教えていただきたい。(溝口委員)

A:コロナ禍で三島では観光客は減っていると感じる。一方、新聞等で地方移住、ワーケーション等農村では注目すべきことだろうと思う。事業を起こしながら農村にどう人を受けて入れていくかを考えていかななくてはいけない。また、農村の方がどう思うかも考えるべきである。しかし、一社一村等のコミュニティで地元の受け入れ態勢ができていればスムーズに進めていけるのではないかと考えている。事業を進めていく上では地域活性化に貢献する地元の企業等との連携が重要である。(土屋課長代理)

A:コロナ後は前と同じように観光客が訪問するとは思わない。コロナ禍で行動が制限され、より本質的なものは何かを考えるようになった。これからは本質的なものが生き残っていくと考えており、そこを追求していかななくてはいけない。そこを追求する中で成長があるのではないかと思う。(河田社長)

A:コロナとどう共生していくかを考えていかななくてはいけない。特にGotoキャンペーンなどで地方へもコロナの脅威が迫ってくる。そんな中でも経済は大事なもので、どう共生するかが重要である。生活スタイルも代わり、人と人の距離感がある田舎の価値観が見

直されている。また受け皿として、移住定住してくるひとたちが気持ちよく住める場所づくり、意識づくり、体制づくりが必要で、それを真剣に考えられる地域でないとコロナの中で生き延びられる地域になることができない。(渡辺専務理事)





## 潤い(環境)のあるまちから 潤う(活力)まちへ

— NPO、企業、行政とのパートナーシップによる  
環境保全から地域経済の活性化への革新的アプローチ —



令和2年(2020年)9月17日(木) 14:00~17:30

場 所: オンライン開催

定 員: 300名(申し込み先着順)

参加費: 無料

※新型コロナウイルス感染症の影響により、延期や中止の可能性もあります

主 権: 公益社団法人土木学会 コンサルタント委員会 地方創生研究小委員会  
後 援: 一般社団法人建設コンサルタンツ協会





## リーダーが語る地方創生 潤い(環境)のあるまちから潤う(活力)まちへ



「環境再生」による潤いあるまちから「地域創生」によって潤うまちへをテーマとする。  
 今回は、静岡県を舞台に、NPO法人(グラウンドワーク三島)、民間企業(加和太建設)、行政(静岡県)といった多様な主体が地方創生にどのように取り組み、地域活性化に貢献しているのか、について、語っていただく。  
 具体的には、それぞれの立場から、地方創生に寄与する具体的取組や、その実現における工夫、苦勞等について紹介する。

### 【プログラム】

- 13:45ー システムの使用方法説明  
 14:00ー14:10 (1) 主催者挨拶、主旨説明  
 14:10ー15:40 (2) 基調講演

- I. (仮題) 市民力・地域力を結集したまちづくりとは?  
 渡辺 豊博 氏 (NPO 法人グラウンドワーク三島 専務理事・事務局長)  
 II. (仮題) 地域企業からの元気なまちづくりへの取組  
 河田 亮一 氏 (加和太建設株式会社 代表取締役)  
 III. (仮題) 行政としての地域づくり・活性化への取組  
 土屋 和大 氏 (静岡県経済産業部農地保全課 課長代理)

- 15:40ー15:50 ~ 休憩 ~  
 15:50ー17:25 (3) パネルディスカッション

#### パネリスト

- 渡辺 豊博 氏 (NPO 法人グラウンドワーク三島 専務理事・事務局長)  
 河田 亮一 氏 (加和太建設株式会社 代表取締役)  
 土屋 和大 氏 (静岡県経済産業部農地保全課 課長代理)

#### コーディネーター

- 溝口 伸一 (公益社団法人土木学会 コンサルタント委員会 地方創生研究小委員会委員)

- 17:25ー17:30 (4) 閉会の挨拶



NPO 法人グラウンドワーク三島  
 専務理事・事務局長  
 渡辺 豊博  
 (わたなべとよひろ)

1950年生まれ  
 1973年東京農工大学  
 農学部卒  
 1973年静岡県庁に入  
 庁し、農業基盤整備  
 事業などを担当  
 2007年農学博士号を  
 取得  
 2008年都留文科大学  
 文学部社会学科教授  
 (市民活動論や富士  
 山学などを開講)



加和太建設株式会社  
 代表取締役  
 河田 亮一  
 (かわたしょういち)

1977年生まれ  
 2002年一橋大学経済  
 学部卒  
 (株) リクルート、  
 (株) 三井住友銀行  
 を経て  
 2007年加和太建設  
 (株) 入社  
 2015年10月  
 代表取締役に就任



静岡県経済産業部  
 農地保全課 課長代理  
 土屋 和大  
 (つちやかとむ)

1967年生まれ  
 1990年東京農業大学  
 農学部卒  
 1990年静岡県庁に入  
 庁し、農業農村整備  
 事業の事業計画など  
 を担当  
 1999年中伊豆町(現  
 伊豆市)技術派遣  
 以降、協働活動による  
 農山村振興に、公私を  
 超えて取り組んでいる

### ■開催概要

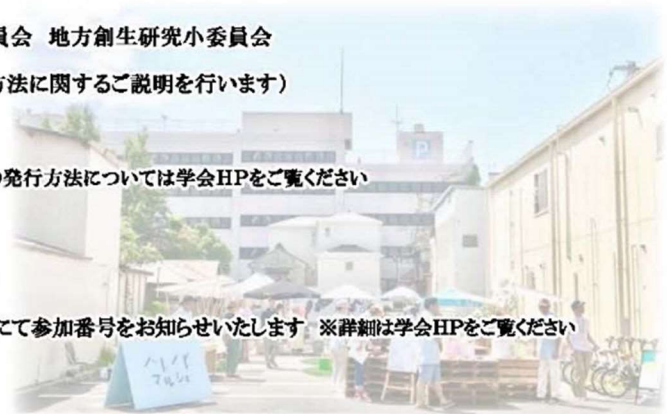
- 主 催：公益社団法人土木学会 コンサルタント委員会 地方創生研究小委員会  
 開催日：2020年9月17日(木)  
 時 間：14:00~17:30 (13:45よりシステムの使用法に関するご説明を行います)  
 場 所：オンライン開催  
 参加費：無 料  
 定 員：300名(申し込み先着順)  
 CPD 単位：3.3 (JSCE20-0294) ※受講証明書の発行方法については学会HPをご覧ください

### ■参加申込方法

- 土木学会HPからお申し込みください  
<http://www.jsce.or.jp/event/active/information.asp>  
 参加申込時にメールアドレスを必ず記入願います  
 参加申し込み受付後に、学会よりお送りする電子メールにて参加番号をお知らせいたします ※詳細は学会HPをご覧ください

### ■参加申込締切日

- 2020年9月10日(木)



【問い合わせ先】 公益社団法人土木学会 コンサルタント委員会 (担当：丸畑)  
 東京都新宿区四谷1丁目外濠公園内  
 TEL：03-3355-3559 FAX：03-5379-0125 E-Mail：maruhata@jsce.or.jp